平成２７年度企画展Ⅳ

双脚輪状文の交流

－装飾古墳の双脚輪状文と和歌山県岩橋千塚古墳群出土埴輪を考える－

平成２７年１０月６日（火）

▼

平成２８年１月１７日（日）

特別出展・和歌山市・大日山35号墳出土の双脚輪状文形冠帽をかぶった人物埴輪
（和歌山県教育委員会所蔵）

熊本県立 装飾古墳館

企画展開催にあたって

現在、日本国内では６６０基が確認されている装飾古墳ですが、装飾には多様な種類の文様が存在します。特に、その一つ、双脚輪状文は希少な文様といえ、熊本市釜尾古墳、熊本市横山古墳（移設）、福岡県広川町弘化谷古墳、桂川町王塚古墳などにあります。現存するものは九州に集中しており、６世紀ごろの装飾古墳にみられます。他方、双脚輪状文は、装飾文様だけでなく人物埴輪や形象埴輪にも用いられており、注目すべき点といえます。

今回、和歌山県教育委員会、和歌山県立紀伊風土記の丘の協力をいただき、岩橋千塚古墳群の双脚輪状文形冠帽をかぶった人物埴輪、双脚輪状文形埴輪を特別出展します。古墳群の調査は、１９０６（明治39）年の紀州徳川家の当主・徳川頼倫により始まります。１９３１（昭和６）年、内務省による史跡指定、１９５２（昭和27）年、特別史跡に指定されました。１９７１（昭和46）年、和歌山県立紀伊風土記の丘が開園しました。以後、古墳群の分布調査、保存修理事業を開始し、古墳群の整備と活用を継続しています。

岩橋千塚古墳群出土の双脚輪状文形埴輪、装飾古墳の双脚輪状文を検討することにより、来館者の皆様にとって、装飾古墳の歴史を知っていただく機会となりますことを願うとともに、開催するにあたってご協力いただいた諸機関に心より御礼申し上げます。

平成27年10月6日

熊本県立装飾古墳館長　木﨑　康弘

目次

○ 企画展開催にあたって　熊本県立装飾古墳館長　木﨑　康弘　1

○ 目次・例言　2

第一章　装飾古墳にみられる双脚輪状文　3

装飾古墳モニタリング～釜尾古墳と横山古墳の比較～　熊本県立装飾古墳館学芸課長　坂口圭太郎　9

第二章　釜尾古墳の発見と整備の歴史　11

釜尾古墳顕彰までの長い道　熊本県立装飾古墳館長　木﨑　康弘　12

第三章　和歌山県岩橋千塚古墳群出土埴輪　15

装飾古墳にみられる双脚輪状文の成立と展開　熊本県立装飾古墳館学芸課　福田　匡朗　19

例言

一　本書は、平成27年10月6日から平成28年1月17日まで開催する平成27年度企画展Ⅳ「双脚輪状文の交流―装飾古墳の双脚輪状文と和歌山県岩橋千塚古墳群出土埴輪を考える―」展の展示図録として作成しました。

二　展示解説は、木﨑館長の総括、坂口学芸課長の指導のもと、福田匡朗が担当し、伊藤幸子、菊川知美がこれを補佐しました。

三　企画展および本書の企画、編集は福田匡朗が担当しました。

四　企画展にご協力いただいた各機関・個人の方々には、以下にお名前を記したとおりです。皆様のご協力に感謝申し上げます。

九州歴史資料館、京都大学大学院工学研究科、熊本市役所観光文化交流局文化振興課、広川町教育委員会、山鹿市立博物館、和歌山県教育委員会、和歌山県立紀伊風土記の丘、遠藤啓介、小椋大輔、尾﨑源太郎、芥子円香、田中元浩、田村保雄、塚本晃大、寺本就一、仲辻慧大、仲原知之、冨加見泰彦、三好栄太郎（以上、五十音順・敬称略）

関連行事

一　熊本県内装飾古墳一斉公開　平成27年10月24・25日（土・日）
　　横山古墳の公開　10月25日（日）

二　講演「神秘の装飾文様～双脚輪状文の交流～」
　　熊本県立装飾古墳館学芸課　福田　匡朗
　　平成27年11月24日（火）午後2時から3時30分まで
　　会場　くまもと県民交流館パレア　10階　会議室7

第１図　九州地方における双脚輪状文を有する装飾古墳

1　福岡県・桂川町王塚古墳　2　佐賀県・鳥栖市田代太田古墳

3　福岡県・広川町弘化谷古墳

4　熊本市・横山古墳（熊本県立装飾古墳館隣接地に移設）　5　熊本市・釜尾古墳

第一章　装飾古墳にみられる双脚輪状文

現在、日本国内では６６０基の装飾古墳が確認されており、線刻されたもの、彩色されたものなど多様です。特に、その一つ、双脚輪状文は希少な文様といえ、熊本市釜尾古墳、熊本市横山古墳（移設）、佐賀県鳥栖市田代太田古墳、福岡県広川町弘化谷古墳、桂川町王塚古墳など、現存するものは九州に集中しており、６世紀ごろの装飾古墳にみられることが理解できます。

熊本市釜尾古墳【国史跡】　古墳時代後期　熊本市北区釜尾町

ＪＲ鹿児島本線西里駅から上熊本駅間、線路にのぞむ釜尾丘陵の東端に位置し、菅原神社の社殿と隣接しています。江戸時代、１７６９（明和６）年に発見されたといわれます。その後、１９１６（大正６）年２月には京都帝国大学考古学研究室による調査があり、１９２１（大正10）年３月には史跡指定されています。

墳丘は直径約13ｍ、高さ約５．５ｍの円墳で、墳丘の南側に安山岩の積石による横穴式石室があります。元来、石室には左右の屍床があったとされますが、現在は仕切り石とみられる石材が一部残るのみです。奥壁に沿って、石屋形が設置されています。双脚輪状文は石屋形の奥壁下、外壁、内壁天井石の内面にあります。他には、三角文、同心円文などが赤・灰・白の三色で彩色されています。また、１９１７（大正６）年には、石室内部の清掃中、管玉２、挂甲残欠、大刀、剣、斧、鞍金具、轡、鏃、須恵器が出土したと伝わります。

第２図　釜尾古墳の石屋形

第３図　釜尾古墳の出土遺物
（熊本県教育委員会所蔵）

熊本市横山古墳【未指定】　古墳時代後期　熊本市北区植木町山本、山鹿市鹿央町岩原に移設

１９６９（昭和44）年、九州縦貫道に伴う埋蔵文化財発掘調査により発見されました。その後、１９９３（平成５）年、熊本県立装飾古墳館に隣接し、移築復元されました。

全長３８．５ｍの小型の前方後円墳と報告されています。墳丘については、葺石（ふきいし）、埴輪は認められず、周溝についても確認されていません。横穴式石室の一部は盗掘により破壊されていましたが、玄室には左右屍床、奥に石屋形（いしやがた）が存在します。双脚輪状文は石屋形の左右袖石（そでいし）にあります。他には、石屋形軒縁に連続三角文、奥壁には三角文の痕跡などがあり、石屋形の左袖石には赤・灰・白の三色からなる三角文、右袖石には赤・灰・白の三色からなる同心円文が彩色されています。

また、石室内出土遺物には、金環（きんかん）、勾玉、管玉、丸玉、小玉、鉄鏃（てつぞく）、刀子、馬具、須恵器、土師器、砥石が出土しています。

第４図　横山古墳の出土遺物
（熊本県教育委員会所蔵）

第５図　横山古墳の石屋形

佐賀県鳥栖市田代太田古墳【国指定】　古墳時代後期

脊振（せふり）山塊の九千部山の支峰から伸びる高位段丘の縁辺部に立地します。1926（大正15）年、国の史跡に指定されていますが、明治初期には開口、発掘されたと伝えられますが、詳細は不明です。

二段築成の円墳の墳丘径は約42mと復元され、南側に開口する横穴式石室には前・中・後室構造からなる玄室があります。装飾文様は後室奥壁、後室袖石（そでいし）外側、中室右側壁にあり、赤・緑・黒色で彩色されています。奥壁には、双脚輪状文、連続三角文、人物、騎馬人物、ゴンドラ船、同心円文が描かれます。須恵器細片、管玉が出土しています。

第６図　現在の田代太田古墳

第７図　田代太田古墳の後室奥壁

福岡県広川町弘化谷古墳【国指定】　古墳時代後期

石人山古墳と同じく八女丘陵上に立地します。１９７０（昭和45）年、果樹園の造成工事中、発見されましたが、石室の半分ほどが破壊されています。１９７７（昭和52）年、史跡指定されています。

墳丘は直径39ｍの円墳であり、周溝、周堤を有します。単室の横穴式石室は、玄室の奥に石屋形（いしやぶた）があります。石屋形の奥壁、側壁、天井部に円文、同心円文、三角文、双脚輪状文、靫（ゆぎ）が描かれます。石屋形からは勾玉、耳環（じかん）、高坏、提瓶（さげべ）の須恵器が出土しています。

第８図　現在の弘化谷古墳（広川町教育委員会提供）

第９図　弘化谷古墳の石屋形　（広川町教育委員会提供）

第10図　弘化谷古墳の石屋形奥壁の赤外線写真
（広川町教育委員会提供）

福岡県桂川町王塚古墳【国指定】 古墳時代後期

加古川東岸の段丘上に立地し、１９３４（昭和９）年、採土工事中に発見されました。１９５２（昭和27）年には特別史跡に指定されています。

墳長約80ｍの前方後円墳であり、前・後室からなる副室構造の横穴式石室を有し、玄室奥には石屋形、奥壁には石棚があります。前室、後室、石屋形が赤・黒・白・緑・黄・灰色で彩色され、三角文、円文、同心円文、双脚輪状文、靫、盾、大刀、弓、蕨手文、騎馬像が描かれます。

変形四獣鏡、装身具は管玉、棗玉、切子玉、小玉、耳環、銀鈴、武具・武器は、捩り環頭大刀、鉄鉾、刀子、鉄鏃、挂甲の小札、馬具は鐙、杏葉、轡、雲珠、須恵器は、台付壺、坏、蓋、高坏、提瓶が出土しています。

参考文献

熊本県教育委員会編　（１９８４）『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告書第68集　熊本

熊本県立装飾古墳館編　（１９９７）『全国の装飾古墳３　福岡県の装飾古墳』熊本

鳥栖市教育委員会編　（２０１０）『田代太田古墳』鳥栖市文化財調査報81集　佐賀

浜田耕作・梅原末治・島田貞彦　（１９１９）「肥後国飽託郡西里村釜尾の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学考古学研究室第３冊　京都

埋蔵文化財研究会編　（２００２）『装飾古墳の展開～彩色系装飾古墳を中心に～』第51回埋蔵文化財研究会集会資料集　福岡

第11図　王塚古墳の前室奥壁
（九州歴史資料館提供）

装飾古墳モニタリング～釜尾古墳と横山古墳の比較～

熊本県立装飾古墳館学芸課長　坂口圭太郎

一．はじめに

熊本県立装飾古墳館では、２００７（平成19）年1月から、装飾古墳館（以下、古墳館とする）屋外にある凝灰岩製レプリカ、横山古墳（古墳館移設）、塚坊主古墳（和水町）を対象に、保存施設内環境のモニタリングを実施してきた。

この3箇所のデータを基に、保存施設の見学室と古墳館の外気温の温湿度データがほぼ一致する時期（10月中旬～11月上旬）を装飾古墳の公開期間として提示した。そして、２００９（平成21）年11月3日に熊本県下では初の試みとなる第一回菊池川流域装飾古墳一斉公開を実施した。このような装飾古墳の一斉公開の先行事例としては、福岡県の筑後川流域と遠賀川流域の装飾古墳一斉公開がある以外は、定期的な公開例は少ない。

２０１０（平成22）年からは、一斉公開を予定する古墳の公開時の入室の影響を見るため、見学室や玄室の短期の温度データの取得を開始した。短期の計測間隔は5分とし、通年の計測間隔は1時間とした。２０１２（平成24）年からは、公開を予定する古墳内の温湿度環境を把握するため、通年の長期観測データと公開時の短期観測データの両方を収集した。この時に、大坊古墳（玉名市）とチブサン古墳（山鹿市）の二箇所において見学室の急激な温度上昇が認められた。そこで、公開による装飾古墳への影響を軽減することを目的とした対策に取り組むことにした。

二．釜尾古墳のモニタリング

釜尾古墳は、熊本市北区釜尾町にあり、古墳時代後期、六世紀ごろに築造されたと考えられている。その存在は『肥後國誌』などで古くから知られている。狭く長い羨道を持ち、石屋形の奥壁や両袖石に連続三角文や双脚輪状文などが、赤や白などの彩色により表現されている。

この釜尾古墳の保存施設は、昭和四〇年代、当時は熊本女子大学教授、後の国学院大学教授乙益重隆氏らによって造られている。石室上部にアーチ型で骨組みをつくり、鉄骨製の梁を枡上に配置し、コンクリートの躯体とその上に土盛りを施している。羨道入口は鉄製の扉によって閉じられ、当時としては先駆的な施設であった。

装飾古墳館がこの釜尾古墳の調査に入った経緯は、この古墳の装飾部位の劣化に対する懸念からである。この劣化の有無を確認するため、温湿度や装飾部の色の見え方について調査を開始した。その結果、劣化、退色があるとされた装飾は、季節変化による色の見え方の差であることが判明した。現在は、京都大学大学院工学研究科建築学専攻小椋大輔准教授のモニタリングによる結露発生メカニズムの解明と対策の検討の為のモニタリングへ移行している。

三．横山古墳のモニタリング

横山古墳は熊本市北区植木町山本にあった装飾古墳で、九州縦貫自動車道路建設によって、記録保存の措置が取られ、１９９３（平成5）年に肥後古代の森鹿央地区へ移築復元された。釜尾古墳と造られた時期をほぼ同じくする古墳である。長い羨道は釜尾古墳とよく似ている。また石屋形の両袖石に双脚輪状文と連続三角文と同心円文が赤と白とで彩色されていることも共通している。位置的にも近く、両古墳には明らかに因果関係が認められる。

装飾古墳館では、野外展示室として、この横山古墳を位置付けており、春と秋の一斉公開以外にも、定期的な一般公開をしている。そのために、風防室、羨道、保存室前と中にデータロガーを設置して、温湿度データを収集している。そのデータを基に、公開方法を随時検討している。

四．装飾古墳館と京都大学のモニタリング

現在、横山古墳は装飾古墳館、釜尾古墳は京都大学がそれぞれで、装飾古墳モニタリングを実施している。両者とも施設の保存環境を調査し、日常的にモ

ニタリングデータを共有し、装飾古墳の保存に対し、積極的に意見交換している。

五．釜尾古墳と横山古墳の内部環境の考察

封土を喪失していた横山古墳は石室全体をコンクリートの部屋で包み込んでいる。その上にバラスと粘質性の高い土を叩き、表面にコンクリートを混ぜ込んだ透水性のある偽土で覆っているが、日照による熱がダイレクトに内部に向かうため、蓄熱が生じやすい構造である。グラフを見ても最も高温になる夏には保存室で24℃を若干超える日がある。冬季の最低温度が12℃ほどで、年較差は約12℃になる。一方、釜尾古墳では玄室内は最高で23℃であり、横山古墳より1℃ほど低い。これは疑似墳丘の表面が芝で覆われている効果に起因していると考えられる。最低温度は14℃で年較差は9℃であり、この点からも釜尾古墳の内部熱環境は移築復元した横山古墳よりも良好である可能性が高い。

六．おわりに

本稿では、釜尾古墳と横山古墳について、装飾古墳モニタリングデータから、両古墳の内部環境について考察を加えた。装飾古墳の保存と活用の両立を目指すために、今後も様々な取り組みが必要となってくる。その根幹を支えるデータの蓄積が、この装飾古墳モニタリングであり、この手法を用いて装飾の異状をいち早く察知し、対策を講じる必要がある。

資料の保存は、私達、博物館に勤める者の責務であり、これからも注意深く装飾古墳を見守っていかなければならないと考える。

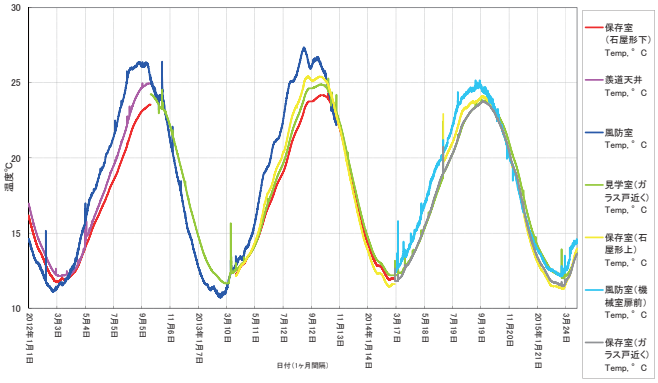
参　考　文　献

池田朋生（２００９）「装飾古墳モニタリングの１方法」熊本県立装飾古墳館　研究紀要第８集　熊本

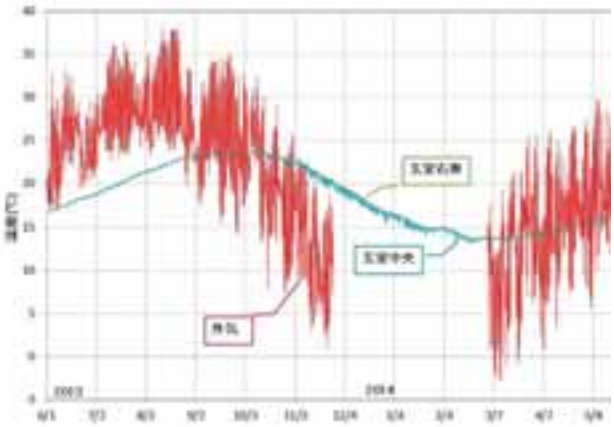
熊本県教育委員会（１９８４）『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告書第68集　熊本

坂口圭太郎・池田朋生・末永崇・小椋大輔（２０１３）「空調設備のない保存施設を有する装飾古墳の公開方法について」日本文化財科学会第30回大会発表要旨集　東京

＊本稿を執筆するにあたって、釜尾古墳のモニタリングデータを京都大学大学院工学研究科建築学専攻小椋大輔准教授及び同大学院生芥子円香さんに提供いただきました。また、お二人には装飾古墳モニタリングのデータ解析等に助言を常々頂いております。この場をお借りして感謝申し上げます。



第 12 図　横山古墳のモニタリングデータ



第 13 図　釜尾古墳のモニタリングデータ

第二章　釜尾古墳の発見と整備の歴史

熊本市に所在する釜尾古墳は１７６９（明和６）年に発見されています。１９１６（大正５）年に刊行された『肥後國誌』には、釜尾古墳の双脚輪状文は〝桔梗ノ紋〟と記載されており、熊本県内では、この種の文様について古くから注目されていたことが理解できます。

平成26年度、装飾古墳館は、熊本市役所文化振興課から１９６７（昭和42）年当時の釜尾古墳の修理工事の日録及び工事写真の複写の提供を受けました。これらの資料からは、装飾古墳の保護施設のみならず、熊本県の文化財行政における草創期の状況、過去三回の釜尾古墳の史跡整備の歴史を知ることができます。

第 14 図　現在の釜尾古墳

第 15 図　大正 15 年から昭和 2 年ごろの釜尾古墳

釜尾古墳の現在の保護施設は１９６７（昭和42）年に完成していますが、それ以前の二時期、保護施設が造られています。１９２１（大正10）年３月の史跡指定を受け、墳丘上に本瓦葺き住宅風の保護施設が設けられました。この施設が第一期の保護施設といえます。その後、１９４５(昭和20)年の台風により、それまでの覆屋根が大破し、石室内部に雨水が侵入してしまいました。終戦直後の時期で早急な復旧は困難であり、第二期のものは１９５１（昭和26）年に覆屋根を再建したものです。

その後、墳丘頂に残されていたイチガイシの切り株にシロアリが発生し、建物を劣化させました。この時、割石積みの壁にゆるみが生じてしまったと推測されます。１９５７（昭和32）年、近隣の井芹川流域を中心とした風水害は、わずかに古墳の旧態を留めていた奥壁と西壁の上部を崩壊させ、石室の大半を土砂で埋没させました。

第 16 図　昭和 26 年に再建された建物

第 17 図　昭和 42 年に修理完成した釜尾古墳

１９６７（昭和42）年、第三期の工事過程は、まず石室の周囲を露出させ、その周囲に基礎溝を掘りました。そして、石室上に盛土、その上に粘土型を塗り固め、マウンドを形成しました。また、先にめぐらした基礎溝に割石を敷き、コンクリートを流し鉄骨を埋め込みました。このような基礎に鉄骨を組み込んだ網目をつくり、コンクリートを流しドーム状の傘を構築したのです。コンクリート・ドームが乾燥した後、石室内の排土作業に移行しました。粘土型をはがし、割石を小口積みに築きました。

工事は石室だけでなく、羨道部にも及びました。崩落した天井石を補強する為、近くの釜尾集落に残存していた箱式石棺の石材で補充し、チェーンブロックで天井石を吊り上げました。羨門部には鉄扉を設け、施錠できるようになりました。

その後、およそ半世紀が経過した現在、石室内の結露が装飾に及ぼす影響を明らかにする為、京都大学大学院、装飾古墳館、熊本市役所により環境調査が継続されています。

参考文献

乙益重隆（１９６７）「装飾古墳の修理」『月刊文化財』第49号　第一法規出版社　東京

熊本県教育委員会編（１９７４）『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告（全）』青潮社　熊本

（１９８４）『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告書第６８集　熊本

森本一瑞（１７７２）『肥後國誌』（後藤是山編１９７１年版）熊本

釜尾古墳顕彰までの長い道

熊本県立装飾古墳館長　木﨑　康弘

一．釜尾古墳への注目

考古学関係者の中では広く知られているように、釜尾古墳の記述で、一番古いものは、『肥後國誌』（森本　１７７２）や『新撰事蹟通考』（八木田１８４０）である。それを逸早く指摘したのは、熊本県立中学濟々黌教諭の下林繁夫。下林は、『九州日日新聞』１９１６（大正５）年８月７日、８日付けの４面に「西里村の古墳▲釜尾の古墳、模様あり▼」という記事を寄稿。その冒頭に次のように書いていた。

「新撰事蹟通考に『飽田郡鎌尾の石室』と見え、肥後國志に五丁手永釜尾村の條に『常福寺迹、天臺の古迹と云此古迹の後山傍畑の際に窟あり始を知らず岸崩れて埋れ居りしを明和六年の春發見せり口窄く内は一間半四方計り切石の壁天井にて向の石壁朱にて塗り桔梗の紋あり常福寺の粮倉にてやあらんか後又埋め置たりと云』と載せたり」と。

また、濱田耕作は、『京都帝國大學文學部考古學研究報告　第三冊』の註（２）に八木田政名の『新撰事蹟通考』（肥後文献叢書所収）からの引用文を、本文に森本一瑞の『肥後國誌』巻之二からの引用文を掲げていた。

そこで、釜尾古墳の記述として最も古いと思われる記述を、『肥後國誌』と『新撰事蹟通考』から抜き書きしたい。

『肥後國誌』

森本一瑞が『肥後国誌草稿』を増補して25巻に編纂した名著で、１７７２（明和９）年に完成させた。その「巻之参」の「飽田郡」「五町手永」「釜尾村」の中に関係箇所がある。

「常福寺跡　天台ノ古跡ト云此古跡ノ後ロ山傍畑ノ際ニ窟アリ始ヲ知ラス岸

崩レテ埋レ居リシヲ明和六年ノ春發見セリ口窄ク内ハ一間半四方計リ切石ノ壁天井ニテ向ノ石壁朱ニテ塗リ桔梗ノ紋アリ常福寺ノ粮倉ニテヤアランカ後又埋メ置タリト云」

釜尾古墳が１７６９（明和６）年春に見つかったことが分かる。また、入口が狭く、内部は「一間半四方」の広さであることや、切石を積み上げて壁や天井が造られていること、奥壁が赤く塗られていること、「桔梗ノ紋」があることなどが記されていた。奥壁は、白と赤の塗り分けがされているのだが、ベンガラの赤が特に目立ったものだろうか。また、江戸期において「桔梗ノ紋」が特記されていたことが、大正期の展開において重要な意味をもっていた。

『新撰事蹟通考』

細川藩士の八木田政名が古文書や古記録などの典拠を明示しながら編纂し、肥後の事跡を通観した名著で、１８４０（天保11）年に完成した。釜尾古墳の石室のことが「巻之九」の「（明應）六年丁巳夏五月木野相直修八代郡大野窟」の按文に「又飽田郡鎌尾ノ石室」と記載されている。そこでどういう評価が行われたのかをみておく。

「按ニ窟ハ北太野村ニアリ（中略）右石室ニ就テ考ルニ阿蘇郡手野村北宮西南二百五十許歩ノ畠中ニ石室二區アリ北宮記北宮速瓶玉命岩隠ノ所故ニ神塚ト云土人又御倉穴ト稱ス巨石以築之今見一穴ハ口塞テ見ルコトヲ得ス一穴ハ口方二尺計アリ又飽田郡鎌尾ノ石室山本郡小野ノ石室山鹿郡津袋ノ御霊塚益城郡陣村ノ座敷塚葦北日奈久田河内石室等（中略）今阿蘇人ノ岩隠穴ト云ハ古言ノ傳ナリ然レバ北宮ノ神塚ハ乃チ阿蘇國造又ハ阿蘇公等ノ墓ナルコト炳然ナリ大野石室モ舊ハ上世貴人ノ墓ニテ破頽セシヲ相直修造ヲ加ヘタルベシ」

八木田は、釜尾古墳の石室を「上世貴人ノ墓」と認識しているようだ。

二．下林繁夫の装飾の確認

既述のことだが、下林は、「西里村の古墳▲釜尾の古墳、模様あり▼（上）（下）」（下林１９１６）を寄稿していた。７月下旬～８月初めのある日に行った調査の速報だった。その（上）の最後に次の文章があった。

「初め肥後國志に釜尾の古墳に桔梗の紋ありとの記事を見たる時、我國に於て桔梗の紋等を用ひたる事は、かゝる古墳築造の時代より極めて後世の事に属す故に或は熊本に於ける最大崇拝の的標たる清正公の家紋が桔梗及蛇の目の両種なるなるが故に蛇の目を桔梗と誤り傳へたるには非ざるかの疑問と起せし、もし余の推測の如くんば蛇の目は即ち同心圓形なるが故にこれは上代より好むで用ひたる我大和民族特有の模様なり」

下林が「桔梗の紋」に異常な関心を抱いていた。そこで執った行動が実地の調査だったわけだ。「西里村の古墳（下）」の冒頭を読もう。

「故に愈實地につきてその模様を見出さんと埋もれたる石片一二と排除せしがはたして一側壁に直立して僅に頭部を現はせる石片に直經一尺四五寸も有るべき同心圓を朱と以て畫きたるものと見出したり」

そして、その重要性を次のように指摘したのだった。

「故に尚この崩壊せる土石を取り去つて精細に調査せば必ず地下に数ケの同種の模様の残れるを見出し得べし、然るに今や斯の如き我大和民族が上代に於ける特有の模様と有する古墳が日々いたずらに小童の遊戯場となり又側壁の積石も歳月と共に崩るゝにまかすれば貴重なるこの研究材料を有する古墳も益湮滅して遂にたづぬ可からざるに至らん」

また、装飾古墳が当時は「二十幾ケ所に過ぎず。然るに我熊本縣下に於てはその大部分なる十八九ケ所」を有することに関して次のように熊本県を評価したのだった。

「故にこの種の研究材料がかくの如く縣下に豊富なることは實に我郷土の誇と云ふべし」

三．濱田耕作の調査と史跡指定化

下林の装飾の確認は、京都帝国大学の濱田が行った釜尾古墳の調査の契機と

なったことは間違いない。ただし、その調査年月は、井寺古墳などの1916（大正5）年12月～17年1月ではなく、2回目の1918年1月で、「當時吾人の調査に漏れたるもの」だった。そして、「大正六年二月釜尾村青年團の本古墳を修理し」とのことが、報告書に記されている（濱田・梅原・島田1919）から、恐らく、1回目の調査時には、調査に堪えうるほどの状況ではなかったのだろう。

この調査によって、『肥後国誌』に記され、下林の興味を引きつけた「桔梗の紋」の実態が明らかにされたのである。また、装飾の評価については、「三角形及び同心圓等を主要素とするもの」筑後の装飾古墳と、「直弧紋を主値とする」肥後の装飾古墳の二大系統があり、肥後の釜尾古墳の装飾は、筑後的だと考えた。さらに、肥後の特徴である「紋様適用の場所」が「石厨子様の障屏を主とする」点を具えているところからみて、「其の構造に於いて肥後的なると同時に、装飾に於いて筑後的なり」との評価を与えたのだった。

1921（大正10）年3月3日、熊本県の第1号の一つとして、井寺古墳や千金甲（甲号、乙号）、大村横穴群、石貫穴観音横穴、石貫ナギノ横穴群と共に、国の史跡に指定された。その指定理由は、「丘陵ノ突端ニ築カレタル圓墳ニシテ石室ハ略南面シ羨道ハ長サ約十五尺玄室ハ方約十尺玄室ノ奥壁ニ接シ元厨子形ノ障屏ヲ構ヘタリ石材ハ厚サ二寸五分其ノ上面ニ彩色ヲ以テ装飾ヲ施セリ」だった。

釜尾古墳で装飾が最初に注意されてから、149年目のこの年、国史跡としての顕彰が始まったのだった。

参考文献

森本一瑞（1772）『肥後國誌』（後藤是山編1971年版）熊本

八木田政名（1840）『新撰事蹟通考』（1910年発行『肥後文献叢書』第参巻所収）熊本

下林繁夫（1916）「西里村の古墳▲釜尾の古墳、模様あり▼」『九州日日新聞』8月7日、8日　熊本

濱田耕作・梅原末治・島田貞彦（1919）『京都帝國大學文學部考古學研究報告　第三冊』京都

西里村の古墳（下）

下林生

▲釜尾の古墳、模様あり▼

第18図　下林繁夫の速報記事

『九州日日新聞』1916（大正5）年8月8日付け

第三章　和歌山県岩橋千塚古墳群出土埴輪

第19図　和歌山県岩橋千塚古墳群の位置

和歌山県和歌山市所在、岩橋千塚古墳群の調査は、1906（明治39）年の紀州徳川家の当主・徳川頼倫により始まります。

1931（昭和6）年、内務省による史跡指定、1952（昭和27）年、特別史跡に指定されました。

1971（昭和46）年には、和歌山県立紀伊風土記の丘が開園しました。以後、古墳群の分布調査、保存修理事業を開始し、古墳群の整備と活用を継続しています。

本企画展で特別出展した双脚輪状文形冠帽をかぶった人物埴輪、双脚輪状文形埴輪のうち、2体の双脚輪状文形冠帽をかぶった人物埴輪は、岩橋千塚古墳群にある大日山35号墳から出土しています。

大日山35号墳は、平成15年度から3カ年にわたり発掘調査が行われ、墳長は約86m、基壇まで含めた総長は約105m、6世紀前半ごろの紀伊地方で最大の前方後円墳であることが判明しました。双脚輪状文形冠帽をかぶった人物埴輪は、大日山35号墳の西造り出しから出土しています。

第20図　大日山35号墳の墳丘（和歌山県教育委員会提供）

第 21 図　大日山 35 号墳出土の双脚輪状文形冠帽をかぶった人物埴輪
（和歌山県教育委員会所蔵）
特別出展・展示期間は 10 月 6 日から 11 月 29 日まで

第 22 図　岩橋千塚古墳群出土の双脚輪状文形埴輪（個人蔵）
特別出展・展示期間は 10 月 6 日から 11 月 29 日まで

第 23 図　大日山 35 号墳の西造り出し（和歌山県教育委員会提供）
双脚輪状文形冠帽をかぶった人物埴輪などの埴輪が出土しています。

第 24 図　岩橋千塚古墳群出土の双脚輪状文形埴輪
（和歌山県立紀伊風土記の丘所蔵　本企画展では未出展）

西造り出しからは、円筒、朝顔形、蓋（きぬがさ）形埴輪、武人、巫女、両面人物の人物埴輪、胡籙（ころく）形、靫（ゆぎ）形の器財（きざい）埴輪も出土しています。また、大日山35墳からは、円柱を有し三分割で制作された大形の家形埴輪が出土している点が注目されます。

参考文献

加藤俊平（2010a）「スイジガイ由来の器財と文様」『考古学研究』57―1　考古学研究会　岡山

（2010b）「スイジガイから双脚輪状文へ」『公開討論会　大日山35号墳の埴輪を考える』和歌山県立紀伊風土記の丘　和歌山

和歌山県立紀伊風土記の丘（2008）『平成20年度特別展　岩橋千塚』和歌山

（2011）記者発表資料『大日山35号墳出土の家形埴輪』和歌山

装飾古墳にみられる双脚輪状文の成立と展開

熊本県立装飾古墳館学芸課　福田　匡朗

一．はじめに

装飾古墳の装飾文様において、熊本県北部に多くみられる連続三角文や福岡県に多くみられる蕨手文とは異なり、双脚輪状文は希少な文様といえる。現時点では、6世紀代の九州地方の装飾古墳では、双脚輪状文は熊本市釜尾古墳、熊本市横山古墳（移設）、佐賀県鳥栖市田代太田古墳、福岡県広川町弘化谷古墳、桂川町王塚古墳に認められる。

これらの古墳について、まずは墳丘形態と石室構造から比較したい。釜尾古墳は墳丘直径13ｍ、高さ5．5ｍの円墳であり、石室構造は前・後室の複室構造の横穴式石室、奥壁には石屋形を設けている。横山古墳は全長38．5ｍの前方後円墳であり、葺石、周溝、埴輪は確認されていない。横穴式石室の石室構造は長い羨道部を有し、奥壁には石屋形を設けている。

田代太田古墳は墳丘直径約42ｍの円墳であり、石室構造は前・中・後室の三室構造からなる横穴式石室を有する。弘化谷古墳は墳丘直径39ｍの円墳であり、単室の横穴式石室を有する。桂川町王塚古墳は墳長約80ｍの前方後円墳であり、前・後室からなる副室構造の横穴式石室を有する。

熊本県、佐賀県、福岡県に分布するこれらの双脚輪状文を有する装飾古墳は、墳丘形態と石室構造ともに一様ではなく、多様な形態を示すといえる。

二．装飾の配置と首長墓系譜からみた双脚輪状文の錯綜

続いて、各古墳の石室内部に双脚輪状文が描かれた箇所を検討したい。釜尾古墳は石屋形内壁天井石の内面、横山古墳（移設）は石屋形の左右袖石、田代太田古墳は玄室奥壁、弘化谷古墳は石屋形の奥壁、王塚古墳は前室奥壁となる。

築造時期について、概ね6世紀前半から中頃ごろにかけての王塚古墳、釜尾古墳、弘化谷古墳、横山古墳（移設）、6世紀後半ごろの田代太田古墳の築造と考えられる。釜尾古墳以外は、各地域の首長墓系譜に連なる古墳である。現存する双脚輪状文を有する装飾古墳は、双脚輪状文が各地域で連鎖するものでなく、錯綜する状況が看取できる。

三．紀伊の双脚輪状文形埴輪と石棚

双脚輪状文は、これまで検討した装飾文様だけでなく人物埴輪や形象埴輪にも用いられている。特に、連弧状の双脚輪状文形埴輪は、分布の中枢が紀伊地域の紀ノ川河口部であり、革製冠帽を表現した埴輪の可能性が高い。

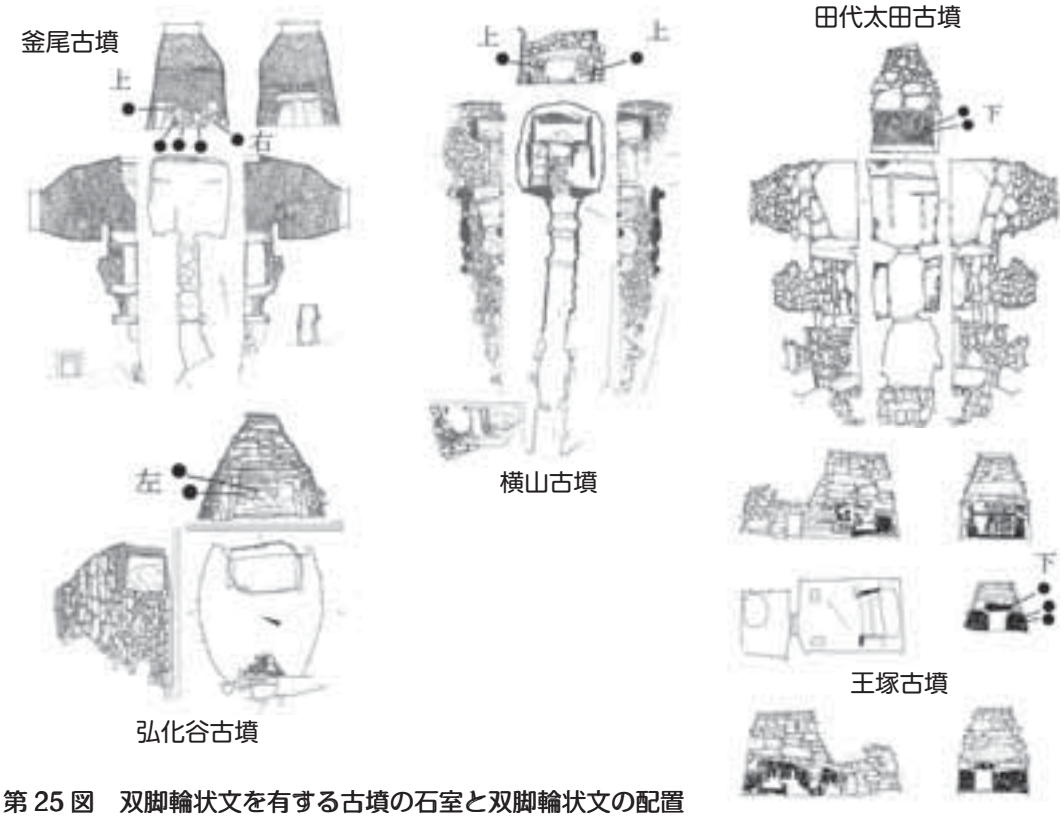
丹野拓氏によれば、双脚輪状文形埴輪は6世紀前半ごろに成立し、真の継体天皇陵と目される大阪府高槻市今城塚古墳の築造に若干先行するという。継体天皇と繋がりが強い近畿北部、北陸・東海地域が分布の空白域であることが興味深い。

さらに、肥後と紀伊地域との関係について、検討する場合、紀伊地域の横穴式石室が分布の中心、石棚が注目される。石棚は、熊本県内の古墳では13例が確認される。これらの全てが紀伊地域の石棚の影響を直接受けているとは考えにくいが、宇城市宇賀岳古墳、氷川町大野窟古墳など緑川流域から氷川流域に分布の集中がみられる。石棚を有する肥後の横穴式石室の存在は、両地域の首長層の交流の結果、墓制に関する情報がもたらされ、紀伊の双脚輪状文形埴輪が装飾古墳の双脚輪状文に変容したものと想定する。

ただし、6世紀代の九州地方の装飾古墳にみられる双脚輪状文が、双脚輪状文形埴輪のルーツともいえる革製冠帽を表現した文様であると評価するには疑問が残る。現状では、人物を表現した装飾文様には、この類の冠帽の表現はみられない。

四．おわりに

埴輪や装飾文様を含めた双脚輪状文は、紀伊地域は双脚左向きが主流に対し、九州地方はどうか。比較的、紀伊地域の埴輪に類似した文様といえる釜尾古墳



第 25 図　双脚輪状文を有する古墳の石室と双脚輪状文の配置
（縮尺不同・各参考文献　引用改編　●は配置と双脚の向き）

は双脚が右向きと上向きが混在し、王塚古墳は下向き、横山古墳は上向きである。九州地方でみられる双脚輪状文の双脚の向きは多様であり、特段、制約はないといえる。

この為、装飾文様の双脚輪状文は、双脚輪状文形埴輪の双脚部分がデザインとして採用されたものと考える。日本列島の古墳築造システムの属性の一つである埴輪は、6世紀には双脚輪状文形埴輪が創出された。九州の古墳には埴輪としては採用されず、装飾文様として双脚輪状文が採用されたといえる。

参　考　文　献

熊本県教育委員会編（1984）『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告書第68集　熊本
鳥栖市教育委員会編（2010）『田代太田古墳』鳥栖市文化財調査報告書第81集　佐賀
丹野拓（2015）「双脚輪状文形埴輪の冠帽としての検討」『河上邦彦先生古稀記念謹呈論文集』河上邦彦先生古稀記念会
古城史雄（2012）「第Ⅵ章考察　第2節　横穴式石室からみた大野窟古墳」『大野窟古墳発掘調査報告書』氷川町教育委員会　熊本
埋蔵文化財研究会編（2002）『装飾古墳の展開～彩色系装飾古墳を中心に～』第51回埋蔵文化財研究会集会資料集　福岡

第 1・19 図については、JAXA 提供「AW3D TM（全世界デジタル 3D 地形データ）」をカシミール 3D で加工、それ以外の図版については各機関提供及び各参考文献から引用改変。

＊　本図録掲載の写真について、無断掲載を固く禁じます。

平成 27 年度企画展Ⅳ

双脚輪状文の交流

－装飾古墳の双脚輪状文と
和歌山県岩橋千塚古墳群出土埴輪を考える－

発　行　日：2015 年 9 月 28 日

編集・発行：熊本県立装飾古墳館
〒 861-0561　熊本県山鹿市鹿央町岩原 3085 番地
TEL 0968-36-2151（代）　FAX 0968-36-2120

印　　刷：株式会社 協和印刷

発 行 者：熊本県立装飾古墳館
所　　属：教育総務局文化課
発行年度：平成 27 年度

平成27年度企画展Ⅳ 『双脚輪状文の交流』図録　正誤表

本図録に下記の誤りがありました。
関係機関並びに関係者の皆様にお詫び申し上げると共に、訂正をお願いいたします。

ページ	誤	正
3頁　10行目	1916（大正6年）	1917（大正6年）
8頁　2行目	加古川東岸	穂波川東岸
11頁　下段8行目	イチガイシ	イチイガシ
15頁　上段タイトル	岩橋千塚古墳群（いわはしせんづか）	岩橋千塚古墳群（いわせせんづか）
19頁　下段3行目	現存する双脚輪状文を有する装飾古墳は	現存する双脚輪状文を有する装飾古墳からは
19頁　下段16行目	大野窟古墳（おおいわや）	大野窟古墳（おおのいわや）

この電子書籍は、熊本県立装飾古墳館 企画展図録 第23集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：双脚輪状文の交流
発行：熊本県立装飾古墳館
〒861-0561　熊本県山鹿市鹿央町岩原3085番地
電話：0968-36-2151
URL：http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦2018年6月1日